

ダバ語における自他動詞対と使役

白井 聡子

1. はじめに

本稿では、ダバ語（中国四川省：チアン語支）における動詞の自他対応と使役について論じる。まず、第1節でダバ語の概要および基本特徴を概説する。第2節では、自動詞と他動詞の対応について述べる。メト方言における形態論的自他対応、自他同形動詞、補助動詞を用いた他動化について記述した上で、他方言との比較を行う。第3節では、使役文の特徴を述べる。特に被使役者の格標識に注目して分析を行う。第4節でまとめる。

1.1. ダバ語について



地図1 ダバ語の話される地域

ダバ語（nDrapa/Zhaba/扎壩/扎巴）は、中国四川省甘孜チベット族自治州道孚県および雅江県で話される、チベット＝ビルマ語派チアン語支の言語である（地図1参照）。方言は、北部方言群と南部方言に大きく分かれるが、方言間の相互理解は可能である。総話者数は約8,000人と推定される（黄1990、龔2007、馮2010）。本稿の議論は、主として、北部方言群に属するメト方言（道孚県仲尼郷麻中村）を対象とするが、一部、ダト方言（北部方言群、扎拖郷扎拖村）および南部方言（瓦多郷吾知村）にも言及する。メト方言のデータは筆者の現地調査に基づく。ダト方言のデータは黄（1991, 2009）、南部方言のデータは龔（2007）を用いる。

1.2. ダパ語メト方言の特徴

ダパ語メト方言には、次の音素が認められる。[1] 子音 /ph [p^h], th [t^h], tʰ [t^h], ch [c^h], kh [k^h]; p, t, t̪, c, k; b, d, d̪, j, g; tsh [ts^h], tʰch, [tʰc^h]; ts, tʰ; dz, dʒ; m, n, n̄, ŋ; m̄ [m̄m], n̄ [n̄n], ŋ̄ [ŋ̄ŋ], ŋ̄ [ŋ̄ŋ]; fh [f^h], sh [s^h], ʧh [ʧ^h]; f, s, ʧ, x, h; v, z, ʒ, γ, fi; w, j; l, r [r]; l̄ [l̄], r̄ [r̄]; [2] 母音 /i, i, u, e [ɪ], ə, o, ε, ʌ, ə, a; ei/; [3] 語声調 (音韻語の後ろに以下の番号で表記する): 1 (高平調), 2 (高降調), 3 (低昇調), 4 (低昇降調)。固有語の音節構造は、最大で CCCV となる。なお、借用語には、鼻母音も認められる。

膠着的な特徴を持ち、接頭辞と接尾辞の両方が用いられる。動詞に付加される接辞としては、方向および否定の接頭辞、アスペクトおよび視点 (egophoricity) の接尾辞がある。このうち、方向接辞は次の5つである: ʌ- 'UPW' (上向き), a- 'DWN' (下向き), kʌ- 'INW' (上流/内向き), ŋʌ- 'OUT' (下流/外向き), tʌ- 'NTL' (不特定/中立)。方向接辞は完了および命令において義務的に付加され、移動を伴わない動詞とも恣意的に結びつく (Shirai 2009, 2018)。本稿では、メト方言の動詞の形式を挙げる際、方向接辞を伴う形式を示す。他の方言については引用元のままとする。

動詞語幹は単音節のものが多いが、一部、2音節以上のものもある。

基本的な構成要素順は動詞後置型 (AOV, SV) である。さまざまな後置詞が用いられるが、前置詞はない。

格標示パターンは、基本的に主格対格型 (A/S vs. O) である。格標識には後置詞が用いられる。主格標識はない (ゼロ標示)。格標識には以下のものがある: =wu 'ACC' (対与格), =perʌ 'CNT' (内容格)¹, =la 'DAT' (与位格), =ji 'BEN' (受益格), =nʌ 'COM' (共格), =ntsha 'ASS' (随伴格), =kʌtʌ 'INS' (具格), =ma 'CMPR' (比格), =rʌ 'GEN' (属格)。詳細は白井 (2010) を参照していただきたい。

1.3. 先行研究

ダパ語の自他動詞対応や使役について中心的に論じた研究はないが、黄 (1991, 2009), 龔 (2007) などの記述文法に一定の言及が見られる。

黄 (2009: 85–86) は、ダト方言におけるヴォイスについて、自動態と使役態が次の方法で表示されると記述している: [1] 語根の声母の交替—自動態 :: 使役態が有声音 :: 無声音または非帯気音 :: 帯気音—; [2] 語根の韻母の交替—i :: e または y :: u—; [3] 接頭辞の変換; [4] 分析形式—動詞 tʂ'u³³ 「～させる」の付加—。さらに、これらを組み合わせて表示される場合もあるとする。

龔 (2007: 91–93) は、南部方言のヴォイスを記述している。自動詞・他動詞の形態的対応を示すペアについて、その他動詞を使役動詞と呼び、自動詞・他動詞

¹「内容格」は白井 (2010) で用いた便宜的な名称。機能については 3.2 節で述べる。この格標識はおそらく複合的な形式で、第二音節は属格の =rʌ と考えられる。

(使役動詞)の対応と使役態を共に扱っている。その形成法の分析では、[1] 動詞語根の声母の交代；[2] 使役動詞 tʃhu³¹ の付加，という二つに大きく分けた上で、[1] をさらに次の二つに分類している：[1-i] 有声声母が自動詞，無声声母が使役動詞；[1-ii] 非帯気音が自動詞，帯気音が使役動詞。

本稿では、2.4 節において、これらの先行研究が示すデータとの比較分析を行う。

2. 動詞の自他対応

ここでは、ダバ語における自動詞と他動詞の対応について述べる。対応のタイプ²としては、他動化と不安定動詞（自他同形）が中心であると考えられる。非他動化（自動詞化）や中立（両極）と確言できる例は、共時的記述レベルでは見つかっていないが、方言を比較すると古い段階にはあった可能性がある。

動詞の自他対応パターンは、その形式から、大きく以下の3つに分けられる：[1] 形態論的対応，[2] 自他同形（不安定動詞タイプ），[3] 補助動詞付加，[4] 補充である。これらのうち、[3] は、生産的に使役形を形成しうる。また、複数の対応パターンを持つ動詞も見られる。なお本稿では[4] 補充法的自他対応については詳しく扱わない。例としては、o-[[u3 「乾く」:: o-kho1 「干す」，tΛ-ɕΛ1 「死ぬ」:: kΛ-se3 「殺す」などがある。

以下、2.1 節から 2.3 節ではダバ語メト方言の自他動詞対応について述べる。2.4 節において、他方言との比較を試みる。

2.1. 形態論的自他対応

他のチベット＝ビルマ系諸言語と同様に、自動詞と他動詞が形態的に近似する語幹を持ち、主として語根初頭音の帯気性や有声性の有無によって区別されるという現象が見られる。このタイプのうち、特に、他動詞が帯気音で対応するペアについては、チベット＝ビルマ祖語の使役化接頭辞 *s- に由来する可能性がある。なお、ダバ語においては、この対応を示す自動詞・他動詞のペアは限られており、非生産的である。

ダバ語に見られる形態論的自他動詞対は、少数の例外を除いて、[1] 自動詞語根初頭が非帯気音 :: 他動詞語根初頭が帯気音，[2] 自動詞語根初頭が有声 :: 他動詞語根初頭が無声という対応を示す。このうち[1]がより多く見られる。このほか、散発的に、母音、初頭子音連続、声調の交替を伴う。

上記[1]の例を(1)に挙げる。各例の左側が自動詞、右側が他動詞である。(1a-h)は典型的なペアである。(1i)は、帯気性に加えて初頭の重子音の有無も異なる。(1j)においては、母音の交替も見られる。この例は、狭義の自他対応ではないが、初頭が非帯気音の形式が無意志動詞、帯気音の形式が意志動詞であるという点で、

² パルデシ他編（2015: 2）の用語を用いた。

前者よりも後者の他動性が高いと考えられるため、ここに挙げておく。なお、(1d, i)については、複数の自他対応パターンが併存する(2.3節参照)。

(1) 【非帯気—帯気】

a.	o-ccu1	「開く」	o-cchu1	「開ける」
b.	tΛ-tçe1	「(布が) 破れる」	tΛ-tçhe1	「破る」
c.	ŋΛ-t[ta1	「(結び目が) ほどける」	ŋΛ-t[tha1	「ほどく」
d.	o-t[ui1	「(目が) 覚める」	o-t[hu1	「覚ます, 覚まさせる」
			(cf.) o-t[ui = t[hu1	「目覚めさせる」
e.	a-t[ti3	「(家が) 倒壊する, 崩れる」	a-t[hi3	「破壊する, 崩す」
f.	ŋΛ-ke3	「(板が) 裂ける, 割れる」	ŋΛ-khe3	「裂く, 割る」
g.	Λ-te1	「出てくる」 ³	Λ-the1	「取り出す」
h.	ŋΛ-ttsia1	「ひび割れる」	ŋΛ-ttshia1	「ひび割れさせる」
i.	Λ-ttsi1	「燃える」	Λ-tshi1	「燃やす」
			(cf.) Λ-ttsi = t[hu1	「燃やす」
j.	tΛ-ntsile3	「(水で) 滑って転ぶ」	tΛ-ntshele3	「(水を) 滑走する」

帯気性が関わるが、例外的な対応を示す例を(2)に挙げる。(2a)においては、自動詞が帯気音、他動詞が非帯気音であり、母音も異なる。(2b)は、狭義の自他対応ではないが、左側の動詞「食べる」よりも右側の動詞「食べさせる」の項が一つ多いという点で自他対応に準ずる特徴を持ち、また、形式面では後者に前気音が現れるという点で、帯気性に準ずる特徴を示すことから、ここに挙げておく。

(2)	a.	tΛ-t[the1	「(紐が) 切れる」	tΛ-t[ta3	「切る」
				(cf) tΛ-t[hi2	「切り取る」(cf. (1e))
	b.	kΛ-ttsi1	「食べる」	tΛ-htsi1	「食べさせる」

上記 [2] 有声 :: 無声による自他対応例は、非帯気 :: 帯気のペアに比べると少ない。(3)に例を挙げる。(3a-c)は語幹初頭が阻害音の例で、いずれも自動詞は有声前気音を伴う有声閉鎖音である。ところが、他動詞の形式は、(3a)が前気音、(3b, c)が帯気音と、異なっている。(3d)は重複タイプの語幹で、他動詞では二音節とも初頭が無声音となる。声調の交替も見られる。(3e, f)においては、j :: çの対応が見られるが、ダパ語の /j/ は音声的に摩擦を伴うことから、自然な対応である。(3f)は二音節語幹で、語幹第一音節のみが j :: çの交替を示し、第二音節は同形である。また、第一音節の母音も自動詞と他動詞で異なっている。

³(1g)の自動詞は、一般的に「来る」を表す動詞 te1 に上向きの方角接辞 Λ- が付加されたもので、「高いところに向かって来る」という移動のほか、袋や壺など上に口の開いたいれものから「出てくる」ことを表す。

(3) 【有声—無声】

a.	o-fjə1	「回る」	o-hco1	「回す」
b.	kΛ-fidΛ1	「折れる」	kΛ-thΛ1	「折る」
c.	a-fido3	「剥がれる」	a-tho3	「剥がす」
d.	tΛ-lala3	「揺れる」	tΛ-l̥ala1	「揺らす」
e.	a-ji3	「溶ける」	a-çi3	「(バターを熱して) 溶かす」
			(cf.) a-ji = [thu3	「(氷を) 溶かす」
f.	a-jelΛ3	「(石が) 転がる」	a-çΛΛ3	「(石を) 転がす」

以下に、もう一つ、例外的な自動詞・他動詞対応を示す。(4)は、自動詞が低昇調、他動詞が高平調と、声調が交替している例である。同様の声調交替は(3d)にも見られるが、他の並行例は見つかっていない。また、興味深いことに、(4)の他動詞 Λ -the1 は(1g)と同じである。つまり、自動詞と他動詞が複数の対応を示す例の一つである(2.3節参照)。論理的には、(4)のペアがより古く、類推によって、より多く見られる自他動詞対応パターンに合うよう(1g)の自動詞が形成されたという可能性が考えられるが、今のところ類例がないため確認できない。さらに、(cf.)に挙げたように、方向接辞(1.2節参照)の異なる同語根の動詞 $\eta\Lambda$ -the1 が、2.3節で扱う補助動詞による自他対応を示す。

(4) 【声調】

	Λ -the3	「(袋から荷物が) 出る」	Λ -the1	「(袋から荷物を) 取り出す」
(cf.)	$\eta\Lambda$ -the1	「(牛が囲いから) 出る」	$\eta\Lambda$ -the = [thu1	「(牛を囲いから) 出す」

2.2. 自他同形 (不安定動詞)

同じ形式が、自動詞としても他動詞としても用いられる例が多数見られる。自他同形タイプであることが確認されている例を(5)に挙げる。

(5) 自他同形

a.	Λ -htçi1	「掛かる／掛ける」
b.	a-fji3	「落ちる／落とす」
c.	a-fjo3	「落ちる, 失せる／落とす, 失う」
d.	a-hpe3	「(家が) 焼ける／焼く」
e.	a-htε3	「沈む (水中に落ちる)／沈める (々落とす)」
f.	a-mə3	「閉まる／閉める」
g.	a-ñε	「閉まる／閉める」
h.	a-peitche3	「(玩具が) 壊れる／壊す」
i.	a-pho3	「ひっくり返る／ひっくり返す」
j.	a-tçhetçhe3	「(服が) 破れる／破る」

- k. a- $[\text{t}]\text{h}\epsilon 3$ 「(茶碗が) 割れる／割る」
 l. $\eta\text{o-ntho}1$ 「止まる／止める」

2.3. 使役の補助動詞を用いた他動化

補助動詞 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ は、生産的に動詞に付加されて使役態を標示する。(6) では、前節 (5l) の自他同形動詞 $\eta\text{o-ntho}1$ 「止まる／止める」に $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ が付加され、使役の意味を表している。

- (6) $\eta\text{o-ntho}=\text{t}[\text{h}]\text{u}1$
 OUT- 止める =CAUS
 (運転手に言って車を) 停めさせる。

補助動詞 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ は、動詞語幹の直後にのみ付加され、音韻的にも通常は (6) のように動詞を中心とする音韻語の一部となる。このことから、接辞であるかどうかの問題となる。(7) は、民話の一場面、命令文が連なる箇所である。第2文と第3文は、 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ が付加された述部を持つ。この例では、述部が強調された結果、 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ が強勢を持つ独自の音韻語として声調 (3: 低昇調) を担っている。このような強調が可能であることから、本稿では、 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ は接尾辞ではなく語であると結論づける。

- (7) $\text{no}=\text{ne}1$ $\text{sh}\epsilon 1$ $\text{hki}1$ $\text{to-ju}3$.
 2SG=TOP 薪 採る NTL- 行く/来る .IMPR
 $\text{ç}\Lambda\text{t}[\text{h}\epsilon]=\text{wu}=\text{ne}3$ $\text{zo}1$ $\text{ko-tsho}3$ $=\text{t}[\text{h}]\text{u}3$.
 幽霊=ACC=TOP かまど INW- 並べる CAUS
 $\text{z}\Lambda\text{nt}\text{ç}[\text{h}i]=\text{wu}3$ $\text{t}\Lambda=\text{le}3$ $\text{a-ji}3$ $=\text{t}[\text{h}]\text{u}3$.
 女の子=ACC 水=汲む DWN- 行く/来る CAUS

おまえは、薪を取りに行きなさい。幽霊にはかまど (に使う石) を並べさせなさい。女の子を水汲みに行かせなさい。

この節では、以下、この補助動詞 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ によって自動詞から他動詞が派生される現象について述べる。使役態の形成を含む $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ の用法の広がりについては、第3節で述べる。

補助動詞 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ の付加による他動化の例を以下に挙げる。なお、(8f, g) は形容詞と共通する語根を持つ状態変化動詞である。

- (8) 他動詞が補助動詞 $=\text{t}[\text{h}]\text{u}$ を持つ自他対応
 a. $\Lambda\text{-pei}3$ 「満ちる」 $\Lambda\text{-pei}=\text{t}[\text{h}]\text{u}3$ 「満たす」
 b. $\Lambda\text{-mphei}1$ 「凍る」 $\Lambda\text{-mphei}=\text{t}[\text{h}]\text{u}1$ 「凍らせる」

- c. $k\lambda-p\lambda\lambda 3$ 「(人が) 集まる」 $k\lambda-p\lambda\lambda = [thu 3]$ 「集める, 集合させる」
 d. $t\lambda-jel\lambda 3$ 「(人が) 転がる」 $t\lambda-jel\lambda = [thu 3]$ 「(人)を 転がす」 cf. (3e)
 e. $t\lambda-nj\lambda 1$ 「変わる」 $t\lambda-nj\lambda = [thu 1]$ 「変える」
 f. $\lambda-lei 3$ 「良くなる」 $\lambda-lei = [thu 3]$ 「良くする」 (cf.) $lele 1$ 「良い」
 g. $n\lambda-fi 1$ 「広くなる」 $n\lambda-fi = [thu 1]$ 「広げる」 (cf.) $fifi 1$ 「広い」

補助動詞 = $[thu]$ による他動化が生産的であることを示す事実として、複数の対応を示す自動詞・他動詞ペアがある。ダバ語において、自他の対応が一对一でない例のほとんどが、一つの自動詞に対して、形態的に対応する他動詞と = $[thu]$ が付加された形式が併存するというものである。意味上は、形態的他動詞も = $[thu]$ が付加された他動詞も大差なく用いられることが多い。(9) のような例である。

(9) = $[thu]$ があってもなくてもほぼ同じ意味のもの

- a. $n\lambda 1$ $t\lambda ni 3$ $\lambda-hca 1$ $fje 3$.
 1SG 湯 UPW- 沸かす PST.1
 私はお湯を沸かした。
- b. $tsheri 1$ $t\lambda ni 3$ $\lambda-hca = [thu 1]$ $hce-a 3$.
 PSN 湯 UPW- 沸く =CAUS PST-B.PFV
 ツェリはお湯を沸かした。

以下に、複数対応を持つ自他動詞ペアを例示する。形態的な他動化と補助動詞 = $[thu]$ による他動化が併存する例としては、既に挙げた (1d) 「覚める／覚ます」、(1i) 「燃える／燃やす」、(3e) 「溶ける／溶かす」などがある。そのほかの組み合わせには、以下のようなものがある。(10a) は、(9) に示したように、ほぼ意味の差がない。それに対し、(10b) では、自他同形の他動詞が無意志動詞、= $[thu]$ を付加した他動詞が意志動詞という差が見られる。

(10) 自他同形と = $[thu]$ が併存

- a. $\lambda-hca 1$ 「沸く／沸かす」 $\lambda-hca = [thu 1]$ 「沸かす」
 b. $k\lambda-n\lambda ei 1$ 「濡れる／(うっかり) 濡らす」 $k\lambda-n\lambda ei = [thu 1]$ 「(わざと) 濡らす」

(11) 補充法と = $[thu]$ が併存

- a. $o-[tu 3]$ 「乾く」 $o-kho 1$ 「干す」； $o-[tu = [thu 1]$ 「乾かす」
 b. $o-tsho 1$ 「起き上がる」 $\lambda-r[te 1]$ 「起こす」； $o-tsho = [thu 1]$ 「起こす」

例外的な複数対応は、2.1節で言及した「出る／取り出す」(1g), (4)である。以下に改めて示す。形態論的な自他対応が併存する点と、複数の自動詞が対応する点において例外的である。

(12) Λ -tɛ1 「出てくる」； Λ -the3 「出る」 Λ -the1 「取り出す」

2.4. 他方言との対応

前節まで、ダパ語メト方言の自他動詞対について述べてきた。ここでは、特に、形態論的自他対応について、黄(2009)、黄(主編)(1992)に所収のダト方言、および、龔(2007)の記述する南部方言のデータを参照し、比較を試みる。

2.4.1. 非帯気 :: 帯気

2.1節(1)に例示した、自動詞 :: 他動詞が非帯気 :: 帯気で対応する例は、南部方言およびダト方言にも多く見られる。(13)にダト方言、(14)に南部方言の例を挙げる。また、語彙的に対応するメト方言の例が見つまっている場合は、本稿における例の番号を右側に付す。

(13) ダト方言(黄2009: 85–86⁴, 黄主編1992) 対応形式

- | | | | | | |
|----|--------------------------------------|-----------|--------------------------------------|-------|------|
| a. | a^{33} -ptʂa ⁵⁵ | 「ほどける」 | a^{33} -ptʂha ⁵⁵ | 「ほどく」 | (1c) |
| b. | a^{55} -tʂɿ ³³ | 「崩れる」 | a^{55} -tʂhɿ ³³ | 「崩す」 | (1e) |
| c. | tə ⁵⁵ -ptʂe ⁵⁵ | 「(紐が)切れる」 | tə ⁵⁵ -tʂhe ⁵⁵ | 「切る」 | (2a) |
| d. | Λ^{33} -pei ⁵⁵ | 「満ちる」 | Λ^{55} -phei ⁵⁵ | 「満たす」 | (8a) |

(14) 南部方言(龔2007) 対応形式

- | | | | | | |
|----|---|-----------------|---|--------------|------|
| a. | $\eta\text{ə}^{35}$ -tɕu ⁵⁵ | 「開く」 | ηe^{35} -tɕhu ⁵⁵ | 「開ける」 | (1a) |
| b. | tə ³⁵ -tɕo ³¹ tɕo ³¹ | 「(布が)破れる」 | tə ³⁵ -tɕho ³¹ tɕho ³¹ | 「破る」 | (1b) |
| c. | $\eta\text{ə}^{35}$ -ptʂa ⁵⁵ | | $\eta\text{ə}^{35}$ -ptʂha ⁵⁵ | | (1c) |
| | | 「(結び目が)ほどけた」 | | 「ほどく」 | |
| d. | r^{55} -tʂyi ³¹ | | r^{55} -tʂhyi ³¹ | | (1d) |
| | | 「(目が)覚める」 | | 「覚ます, 覚まさせる」 | |
| e. | a^{33} -tʂɿ ⁵⁵ | | a^{33} -tʂhɿ ⁵⁵ | | (1e) |
| | | 「(壁が)倒壊する, 崩れる」 | | 「破壊する, 崩す」 | |
| f. | a^{55} -ptʂa ⁵⁵ | | a^{55} -ptʂha ⁵⁵ | | (1h) |
| | | 「(石が)裂ける, 割れる」 | | 「裂く, 割る」 | |
| g. | r^{55} -ptʂi ⁵⁵ | 「燃える」 | r^{55} -ptʂhi ⁵⁵ | 「燃やす」 | (1i) |

⁴黄(2009)では、ダパ語ダト方言の帯気音記号 [ʰ] が /h/ と表記されているが、本稿では黄(主編)(1992)の表記に合わせて /h/ とした。

- h. tə⁵⁵-ptʂe⁵⁵ 「(紐が) 切れる」 tə⁵⁵-ptʂhe⁵⁵ 「切る」 (2a)
 i. tə³⁵-pi³¹tʂi³¹-a³¹ 「(卓が) 壊れた」 tə³⁵-phi³¹tʂhi³¹-a³¹ 「壊した」 (5h)
 j. tə⁵⁵-ktʂo⁵⁵ 「(茶碗が) 割れる」 tə⁵⁵-ktʂho⁵⁵ 「割る」 (5k)

以上の例から、特に南部方言にこのタイプの自他対応が多いことが分かる。ダト方言については、メト方言や南部方言ほど多くの例は報告されていない。

また、方言間で異なる語形成法を持つ例が一部に見られる。「切れる／切る」を意味するペアは、(13c), (14h) に見るように、ダト方言と南部方言では帯気性による交替だが、メト方言では(2a)に示すように有声性による交替を示す。(13d)に対応するメト方言の語彙は、帯気性によるペアが見つかっておらず、生産的な補助動詞を用いた他動化のみが見られる。また、(14i, j)に対応するメト方言の語彙は、自他同形タイプである。

2.4.2. 有声 :: 無声

有声 :: 無声タイプの自他対応は、数は少ないものの、方言間でよく対応する。

(15) ダト方言 (黄 2009: 85–86, 黄主編 1992) 対応形式

- a. o⁵⁵-bjjo⁵⁵ 「回る」 o⁵⁵-ʂcço⁵⁵ 「回す」 (3a)
 b. kɰ³³-vda⁵⁵ 「折れる」 kə⁵⁵-thə⁵⁵ 「折る」 (3b)
 c. la⁵⁵la⁵⁵ 「揺れる」 ɭa⁵⁵ɭa⁵⁵ 「揺らす」 (3d)
 d. a³³-ji⁵⁵ 「溶ける」 a³³-çi⁵⁵ 「溶かす」 (3e)
 e. tɰ³³-li⁵⁵ 「倒れる」 tɰ³³-ɭe⁵⁵ 「倒す」 (3f)

(16) 南部方言 (龔 2007) 対応形式

- a. r⁵⁵-dzu⁵⁵ 「回る」 r⁵⁵-ʂtʂu⁵⁵ 「回す」 (3a)
 b. tə⁵⁵-də³¹ 「折れる」 tə⁵⁵-thə³¹ 「折る」 (3b)
 c. a⁵⁵-do³¹ 「剥がれる」 a⁵⁵-tho³¹ 「剥がす」 (3c)
 d. la⁵⁵la⁵⁵ 「揺れる」 ɭa⁵⁵ɭa⁵⁵ 「揺らす」 (3d)
 e. tə³¹-zə⁵⁵lə³¹ 「倒れる」 tə³¹-çə⁵⁵lə³¹ 「倒す」 (3f)

ここで注目したいのは、ダト方言において、(15a, b)のように、初頭子音連続の交替が見られることである。(15a)ではb-が、(15b)ではv-が、それぞれ自動詞語幹初頭に見られることから、これらが非他動化接辞の名残ではないかと考えられる。既に挙げた(13c)も同様の子音連続の例で、自動詞語幹初頭にp-が見られる。

2.1節では、メト方言について、散発的に初頭子音連続の交替が見られることを述べた。改めてその例を確認すると、(1i), (3b), (3c)において、自動詞初頭の形式が、ダト方言のp-/b-/v-に対応している可能性が高い。

南部方言においても、初頭子音連続の有無が関わるという点で並行的な自他対応の例が見られる。いずれも自動詞に初頭子音連続が見られる。

(17) 南部方言	対応形式
a. $\eta\text{ə}^{35}\text{-}\text{ʂ}\text{t}\text{h}\text{e}^{55}$ 「出てくる」	$\eta\text{ə}^{35}\text{-}\text{t}\text{h}\text{e}^{31}$ 「取り出す」 (12)
b. $\text{a}^{55}\text{-}\text{v}\text{z}\text{i}^{31}$ 「(戸が) 閉まっている」	$\text{a}^{55}\text{-}\text{z}\text{e}^{55}$ 「閉める」 —

以上のことから、自動詞の初頭子音連続は、非他動化的派生の名残であると考えられる。また、その一部は、有声 :: 無声による自他動詞対の一部として現代語に残っている。非他動化の形態法は、かなり古い段階で生産性を失ったと考えられる。

2.4.3. その他の形態論的自他対応

ダト方言については、母音および方向接辞⁵による自他交替も見られる(黄 2009: 86)。

ダト方言において母音交替によって形成される自他動詞対を(18)に示す。メト方言においては、2.1節で述べたように、母音交替は散発的に他の形態交替と共に見られるのみで((1j), (2a), (3a, f)), 母音交替のみによる自他対応は見つっていない。また、これらの散発的な母音交替の例はいずれもダト方言の母音交替例と語彙的に対応しない。

(18) ダト方言 (黄 2009: 86)	対応形式
$\text{a}^{33}\text{-}\text{t}\text{ʂ}\text{h}\text{i}^{55}$ 「(茶碗が) 割れる」	$\text{a}^{33}\text{-}\text{t}\text{ʂ}\text{h}\text{e}^{55}$ 「割る」 (5k)
$\eta\text{ə}^{55}\text{-}\text{t}\text{h}\text{i}^{55}$ 「出てくる」	$\eta\text{ə}^{33}\text{-}\text{t}\text{h}\text{e}^{55}$ 「取り出す」 (12)
$\text{o}^{33}\text{-}\text{s}\text{y}^{55}$ 「生きる」	$\text{a}^{33}\text{-}\text{s}\text{u}^{55}$ 「養う, 生かす」 —

ダト方言において、方向接辞の交替によって形成される自他対応の例を(19)に示す。

(19) ダト方言 (黄 2009: 86)	対応形式
a. $\Lambda^{33}\text{-}\text{ʂ}\text{c}\text{c}\text{a}^{55}$ 「(湯が) 沸く」	$\text{a}^{33}\text{-}\text{ʂ}\text{c}\text{c}\text{a}^{55}$ 「沸かす」 (10a)
b. $\text{t}\text{ə}^{55}\text{-}\text{p}\text{t}\text{sh}\text{i}\text{a}^{55}$ 「(竹が) 割れる, 裂ける」	$\eta\text{ə}^{33}\text{-}\text{p}\text{t}\text{sh}\text{i}\text{a}^{55}$ 「割る, 裂く」 (1h)
c. $\text{t}\Lambda^{33}\text{-}\text{t}\text{ʂ}^{\text{h}}\text{y}^{55}\text{t}\text{ʂ}^{\text{h}}\text{y}^{55}$ 「驚く」	$\text{o}^{55}\text{-}\text{t}\text{ʂ}^{\text{h}}\text{u}^{55}$ 「驚かす」 —

メト方言においては、方向接辞の交替による自他対応の例は見つっていない。

⁵ 方向接辞は、ダバ語のいずれの方言でも、1.2節で述べたメト方言と同様に、完了および命令において義務的に付加され、移動を伴わない動詞の場合は、いずれかの方向接辞が、方向性と関係なく結びつく。

(19a)に形式的に対応する例は拙著 Shirai (2009: 12)に挙げたが、自他対応ではなく、目的語の違いによる方向接辞の交替である。(20)に示すように、「沸かす／煮る」を意味する動詞語幹が、目的語によって異なる方向接辞をとる：水やお茶を沸かす場合は上向き、肉や野菜を煮る場合は下向き、ミルクを沸かす場合は内向きの方向接辞が付加される。なお、この動詞は、(10a)に示したとおり、メト方言においては自他同形（補助動詞付加も可能）である。

(20) メト方言 (Shirai 2009: 12 より) ⁶

“boil”	Λ-hca1 (water/tea);	a-hca3 (meat/vegetable);	kΛ-hca1 (milk)
	UPW-boil	DWN-boil	INW-boil

母音や方向接辞の交替がどのような歴史的変遷をたどったかについては、今後さらなる比較、分析が必要である。

3. 使役文

本節では、メト方言における補助動詞 =tʰu によって形成された使役文の特徴について述べる。

3.1. 補助動詞 =tʰu の機能

補助動詞 =tʰu は生産的に動詞に付加され、使役者項を導入する。=tʰu の付加された動詞は必ず意志的な動作を表すと考えられる。(10b)に示したように、自他同形の動詞 kə-ñei1 「濡れる／濡らす」は、うっかり濡らしてしまった場合にも用いられるが、=tʰu を伴う他動詞 kə-ñei=tʰu1 は、故意に濡らすことを意味する。また、次の例の最初の文では、無意志動詞 a-mpho 「負ける」に =tʰu が付加され、形式上の被使役者 jo3 「自分」とともに用いることで、故意に負けたことを意味している。

(21)	aco3	jaça3	te = anΛ2	jo3	a-mpho = tʰu3	hce-a3.
	PSN	強い = [逆接]		自分	DWN- 負ける = CAUS	PST-B.PFV
	nəvo1	Λ-khε = tʰu1	hce-a3.			
	姉妹	UPW- 勝つ -CAUS	PST-B.PFV			

アキヨは強いのにわざと負けた (Lit. 自分を負けさせた)。妹に勝たせてやった。

⁶ 音韻表記を本稿の方式に合わせて改めた。

3.2. 使役文における格標識

ここで、使役文で使役者と被使役者の関係がどのように表示されるかを分析する。

例 (21) の二つの文、および、次の (22) において、使役者と被使役者がともに主格（格標識を伴わない形式）で現れる。

- (22) $\eta a1$ $\eta o r o 1$ $ja = wu 2$ $k\lambda - nt\check{c}hi = [hu1$ $hje3.$
 1SG 3SG 手=ACC INW- 見る =CAUS PST.1

私は彼に手を見せた。

ダパ語において、格標識の省略は頻繁に見られる現象である。特に、文脈から文法関係が明らかな場合は、主語以外の項も格標識なしで現れることが多い。(23) に例を示す。

- (23) $tsheri1$ $nthei3$ $\Delta - mphei = [hu1$ $hcj - a3.$
 PSN 肉 UPW- 凍る =CAUS PST-B.PFV

ツェリは肉を凍らせた。

使役者と被使役者を格標識によって区別する場合、使役者は常に主格となる。被使役者は、対与格 =wu ないし内容格 =per Δ で表示される。

ここで、対与格と内容格について説明しておく。対与格 =wu は、(24) に示すように、目的語を明示する際に最も一般的に用いられる格標識である。一方、内容格 =per Δ は、日本語の「～のこと（を）」に似た機能を持つ。(25), (26) のように、主として人を表す名詞や人称代名詞に付加され、言及の内容や動作の対象であることを明示する。

- (24) $me3$ $phe = wu3$ $k\lambda - t\lambda 1$ $hci3.$
 母 父=ACC INW- 打つ PST

母が父をぶった。

- (25) $\eta a1$ $rendzo3$ $no = per\Delta 2$ $m\text{̥}em\text{̥}e = [A3.$
 1SG しょっちゅう 2SG=CNT 考える =IPFV

私はしょっちゅうあなたのことを考えます。(白井 2010: 298) ⁷

⁷ 表記は本稿の方式に合わせた。

- (26) none = pεrΛ1 tsi3 ɕaɕal re3.
2DL=CNT 食べる 強い COP

(もし振り返ったら、鬼が) お前たち 2 人をきっと食べてしまう。(ibid.)

既出の (7) および (27) ~ (29) は、被使役者が対与格 =wu で表示される / 表示されうる例である。(29) は助詞がない方が自然と判断された例だが、あえて助詞を用いる場合は =wu が用いられる。

- (7) (第 2 文, 第 3 文を再掲)

ɕΛthe = wu = ne3 zo1 ko-tsho3 = [hu3.
幽霊 = ACC = TOP かまど INW- 並べる CAUS

zAntɕhi = wu3 tΛ = le3 a-ji3 = [hu3.
女の子 = ACC 水 = 汲む DWN- 行く / 来る CAUS

幽霊にはかまど (に使う石) を並べさせなさい。女の子を水汲みに行かせなさい。

- (27) taɕi3 ŋa = wu3 figefige = wu3 melΛ3 tΛ-hte = [hu1 hce3.
PSN 1SG=ACC 先生 = ACC バター NTL- 渡す = CAUS PST

タシは私に先生へバターを渡させた。

- (28) ŋa1 taɕi(= wu)3 figefige = wu3 melΛ3 tΛ-khe = [hu1 fje3.
1SG PSN=ACC 先生 = ACC バター NTL- 与える = CAUS PST.1

私はタシに先生へバターを差し上げさせた。

- (29) ŋgu[thi-re2 ŋore(? = wu)1 fidowu2 kΛ-pΛΛ = [hu3 hcj-a3.
指導者 -PL 3PL(=ACC) 一緒に INW- 集まる = CAUS PST-B.PFV

指導者たちが彼らを一箇所に集めた。

一方、次の (30) ~ (35) では、被使役者が内容格 =pεrΛ で表示される / 表示されうる。

- (30) tsheri1 lozo = pεrΛ3 nphei = ta1 a-ntshelε3 + le = [hu3 hcj-a3.
PSN PSN=CNT 氷 = 上 DWN- 滑る + 置く = CAUS PST-B.PFV

ツェリはロゾを氷の上で滑らせた。

- (31) miwo = pɛɾΛ4 kΛ-fja = t̥hu3 hcj-a3.
 老婆=CNT INW-泊まる =CAUS PST-B.PFV
 老婆を泊めてやった。
- (32) tsheri1 lozo = nΛ3 t̥aɕi = nɛ = pɛɾΛ3 ko-ɾoɾo = t̥hu3 hcj-a3.
 PSN PSN=COM PSN=二=CNT INW-知り合う =CAUS PST-B.PFV
 ツェリはロゾとタシの二人を紹介した（知り合わせた）。
- (33) lozo3 tsheri = pɛɾΛ1 o-t̥u = t̥hu1 hce3.
 PSN PSN=CNT UPW-目覚める =CAUS PST
 ロゾはツェリを起こした（ツェリについて目覚めさせた）。
- (34) tɛ = i2 tΛ-jelΛ3, tsheri1 ŋoro = pɛɾΛ1 o-tsho = t̥hu1 hce3.
 one=CLF NTL-転がる PSN 3SG=CNT UPW-起きる =CAUS PST
 ある人が転んで、ツェリはその人を助け起こした（起きさせた）。
- cf. tɛ = i2 tΛ-jelΛ3, tsheri1 ŋoro = pɛɾΛ1 Λ-r̥t̥ɛ1 hce3.
 one=CLF NTL-転がる PSN 3SG=CNT UPW-起こす PST
 ある人が転んで、ツェリはその人を助け起こした。
- (35) phe3 tsheri(= pɛɾΛ1) tΛ-jelΛ = t̥hu3 t-ɛ3.
 父 PSN=CNT NTL-転がる =CAUS IPFV-B.IPFV
 お父さんがツェリを（遊びで）転がらせている。

被使役者が対与格を伴う例と内容格を伴う例の区別については、以下のことが指摘できる。

現在見つかっている範囲では、内容格を伴う例の方が多い。また、対与格の例はいずれも使役者が被使役者に行為を強制する使役であるのに対し、内容格の例には被使役者の意志を容認するものも含まれる。たとえば、(30)の動詞 a-ntshɛle + le3 「(わごと) 滑る」は、(36)のように、滑る場所で足を滑らせて移動する行為を表す意志動詞である。(35)の動詞 tΛ-jelΛ3 「転がる」は、無意志動詞としても用いられうるが、この文の聞き取り調査時には、(37)のように自主的に転がって遊んでいる場面を前提に使役文を作ってもらった。(31), (34)も、容認使役であると考えられる。(33)については、強制か容認かはっきりしない。

- (36) lozo3 nphei = ta1 ntshelɛ3 + lɛ = t-ɛ3.
 PSN 氷 = 上 滑る + 置く = IPFV-B.IPFV
 ロゾは氷の上で（わざと）滑っている。 cf. (30)

- (37) tsheri tɕuu2 ta-jelɔ3 t-ɛ3.
 PSN 今 NTL- 転がる IPFV-B.IPFV
 ツェリは、今、（わざと）転がっている。 cf. (35)

以上のことから、強制使役の被使役者には対与格が、容認使役の被使役者には内容格が用いられる傾向があるが、強制使役であっても内容格が用いられる可能性がある」と結論づけられる。

4. まとめ

この論文では、ダバ語における動詞の自他対応および使役について記述と分析を行った。この研究から以下のことが明らかになった。

ダバ語メト方言における自動詞と他動詞の対応には、[1] 形態論的対応、[2] 自他同形（不安定動詞タイプ）、[3] 補助動詞付加、[4] 補充の4種類が見られる。本稿では主に[1]～[3]について論じた。[1]についてはさらに方言比較の観点からも分析を行った。

[1]形態論的対応には、自動詞::他動詞が非帯気::帯気の交替を示すものが多い。有声::無声の交替も見られる。このほか、初頭子音連続や母音の交替も散発的に見られる。他方言との比較から、ダバ語には古い段階で非他動化（自動詞化）の派生接辞も存在していたものの、早い段階で生産性を失った可能性があると考えられる。非帯気::帯気の交替はチベット=ビルマ祖語の使役接辞 *s- と関係している可能性があるが、やはり生産性を失っている。共時的には[3]補助動詞付加による他動詞化が最も生産的で、[2]自他同形の動詞も多く見られる。

他動詞化に用いられる補助動詞 =tɥu は生産的に動詞に付加され、使役者項を導入する。これが付加された動詞は、常に、意志的な動作を表すと考えられる。

ダバ語の使役文において、被使役者の格表示には、主格（ゼロ）、対与格 =wu, 内容格 =perɔ の3種類が見られる。このうち、主格形式となるのは、文脈から文法関係が明らかの場合に格標識が省略されているものと考えられる。対与格と内容格の違いについては、強制使役の被使役者には対与格が、容認使役の被使役者には内容格が用いられる傾向があるが、強制使役であっても内容格が用いられる可能性がある」と結論づけられる。

略号

1	first person	CNT	content (case)	NTL	neutral directional
2	second person	COM	comitative	O	object
3	third person	COP	copula	OUT	outward directional
A	transitive subject	DAT	dative-locative	PFV	perfective
ACC	accusative-dative	DL	dual	PL	plural
ASS	associative	DWN	downward directional	PSN	personal name
B	non-egophoric	GEN	genitive	PST	past
BEN	benefactive	IMPR	imperative	S	intransitive subject
CAUS	causative	INS	instrumental	SG	singular
CLF	classifier	INW	inward directional	TOP	topic
CMPR	comparative (case)	IPFV	imperfective	UPW	upward directional

謝辞

ダバ語メト方言の現地調査に当たっては、ネグギェラモさん（女性、1945年生まれ）とご家族・ご親戚の皆さんにご協力いただいた。ここに記して深く感謝する。また、この研究は、JSPS 科研費（課題番号 16H03414, 17J40087）の助成を受けたものである。

参考文献

- Feng, Min [馮敏]. 2010. 《扎巴藏族—21世紀人類學母系製社會田野調查》. 北京：民族出版社.
- Gong, Qunhu [龔群虎]. 2007. 《扎壩語研究》(中国新發現語言研究叢書). 北京：民族出版社.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 1990. 〈扎壩語概況〉《中央民族學院學報》1990. 4: 71–82.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 1991. 〈扎壩語〉戴慶厦、黃布凡、傅愛蘭、仁增旺姆、劉菊黃《藏緬語十五種》，pp. 64–97. 北京：北京燕山出版社.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 2009. 《川西藏區的語言》北京：中國藏學出版社.
- Huang, Bufan, et al. (eds.) [黃布凡 主編]. 1992. 《藏緬語族語言詞匯》北京：中央民族學院出版社.
- バルデシ プラシヤント, 桐生和幸, ナロック ハイコ (編). 2015. 『有対動詞の通言語的研究 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
- Shirai, Satoko. 2009. Directional prefixes in nDrapa and neighboring languages: an areal feature of western Sichuan. In: Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*. Senri Ethnological Studies 75, pp. 7–20. Suita: National Museum of Ethnology.
- 白井聡子. 2010. 「ダバ語の格を表す形式」澤田英夫 (編) 『チベット=ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』, pp. 287–310. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko. 2018. An analysis of the aspect-marking function of directional prefixes in nDrapa. In: Tooru Hayasi, Tomoyuki Kubo, Setsu Fujishiro, Noriko Ohasaki, Yasuhiro Kishida, and Mutsumi Sugahara (eds.) *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume*. Contribution to the Studies for Eurasian Languages Series, Vol. 20, pp. 405–420. Kobe: Consortium of Studies of Eurasian Languages.